

「辺境都市」の魅力

グローバルとローカルの間で

東 善 明

中国では二〇一〇年開催予定の上海万博が話題である。私は万博といえば、自分の生まれた一九七〇年開催の大阪万博を思い出す。小学生

の頃、未来都市のようなパビリオン群や世界各国の民族文化の虜となった私は、飽きもせず両親が現地で購入した記念写真集を眺めた。それは遙かなる未来や遠方への時間的・空間的な超越体験だった。実際に、当時の「世界」は広く遠かったように思う。外国どころか、故郷から遠く離れた北海道や沖縄にもエキゾチズムが漂っていた。

それから約四〇年、未来都市へはまだ行けないが、時間と旅費さえあれば空間的にはどこにでも行ける時代となった。交通機関の発達や流通システムの改善、貿易や投資の自由化、個人所得の向上を通じて、我々は国内外を問わず遠く離れた場所へ就学し就職し旅行できるようになり、工場で作られるモノであれば何でも国境を越えて入手できるようになった。経済発展は「世界」を縮小させたのである。しかし同時に、都市景観やライフスタイルは国内で、あるいは海外との関係において、均質化しつつあ

る。

一体化する中国

経済発展の道をひた走る中国では、全体として、今まさにこつした「世界」の縮小、すなわち「グローバル化」や「都市の均質化」という波と、「ローカル性の希薄化」が進行している。出稼ぎ者数は年々増加し、旅行ブームが訪れて久しく、標準語がますます浸透し、全国横断的なTVオーディション番組が人気を博し、地方料理の洒落たレストラン網が全国に広がり、大都市には国際ブランド品が並び、小都市でさえ地球規模で拡大するファストフード店舗が増殖するなど中国全土が一体化しつつある。

こつした中、大変幸運なことに、野副先生を団長とする、中国東北部の吉林省・延辺朝鮮族自治州（以下「延辺州」）への訪問団に参加させて頂く機会があった。延辺州は北朝鮮やロシアとの国境沿いにある、紛れもない辺境地域である。果たして、こつという辺境地域にも「グローバル化」や「都市の均質化」という現代の大波は押し寄せているのだろうか？そして、そ

の裏返しとも言える「ローカル性の希薄化」はどうか？以下ではこつした点につき、延辺州での滞在を通じて私の受けた印象等をご紹介します。

延辺州に関して私がまず驚いたのは、北京から直行便が飛んでいるという事実だった。機内で二時間眠ると到着する場所に「辺境」の言葉は似合わない。次に、州政府のある延吉市やロシア国境貿易が盛んな琿春市を訪問し、いずれも日本の地方都市的な景観を呈するまでに発展していることに驚いた。

北京や上海などのメガシティとは比べるべくもないが、それでもビルが立ち並び、地元資本のデパートに人が集まり、国際ブランド商品が売られているという光景は中国の他都市と同じであり、この辺境地域にも「グローバル化」と「都市の均質化」という大波が押し寄せてきていることを実感した。

「都市の均質化」の背景

その背景にあるもの言うまでもなく経済発展だ。二〇〇八年の延辺州GDPは前年比+18%と中国平均を上回る勢いで成長している。固定資産投資は同+42%、小売売上は同+27%と、道路や建物などが続々と作られ、人々の消費意欲の高いことが分かる。こつした目覚ましい経済発展を実現してきたものは、次の二つの異なる発展モデルである。

一つ目は、外需モデルでも言うべき方式だ。中国は一九七八年からの改革開放で海外企

業等の積極的な誘致を始めたが、これは中国の安い土地と労働力に海外の資本と技術を使って作った製品を、購買力の高い先進国に輸出するモデルである。この結果八〇～九〇年代にかけて珠江デルタや長江デルタなどの沿海部が大いに発展した。外需モデルは今でも、今度は沿海部から内陸部に分散する形で続いている。

延辺州でも「琿春辺境経済合作区」等の開発区が設けられており、日本や韓国向けの衣料、木材加工品などが製造されていた。また延辺州は、北朝鮮・ロシアとの国境である図們江周辺を日本や欧州市場も見据えて開発するという多国間プロジェクトの拠点でもあり、対外貿易を柱とする将来の潜在成長力は大きい。これを見据えてか、主に日系企業を専門に誘致する開発区が新たに建設されていたのも印象的だった。

二つ目は内需モデルである。外需モデルは地域間格差や貿易黒字拡大などの不均衡を生んでいることもあり、中国政府はよりバランスのとれた経済成長のため、「沿海部・輸出」から「内陸部・国内販売」に重点を移してきている。これは中国に資本や技術が蓄積され始め、自国民の所得水準が向上してきたことの現れでもあるが、こうした変化は昨年の金融危機以降、外需モデルで買い手の役割を担う先進国の購買力が弱まったため更に加速している。

延辺州は西部大開発や東北振興といった従来からの政策支援もあり、空港や道路が整備され、高速鉄道建設も予定されているなど恵まれた環境にある。インフラ整備は企業物流にもブ

ラスであり、開発区には、実際にナッツ類や飲料といった食品加工、医療機器、農機具製造など国内販売を主とする製造業も少なくないように見受けられた。

延辺独自の「ローカル性」

中国の他の地域と同じように、外需モデルと内需モデルの両輪で経済発展を成し遂げ、「グローバル化」や「都市の均質化」に直面している延辺州だが、興味深いことに、朝鮮族の自治エリアであるためか、独自の「ローカル性」を希薄化させずに保持・強化していることには感銘を受けた。街にはハングル文字が溢れ、耳には朝鮮語が飛び込んでくる。朝鮮料理レストランや韓国製品の小売店も多く、中国であつて中国でないようなエキゾチズムがある。

重要なことは、こうした「ローカル性」が、消費対象として再発見された記号性の強い「商品価値」（例えば「地域限定グッズ」）ではなく、実際に当地の経済発展ダイナミズムに寄与する「生きたシステム」であることだ。

例えば、州住民二二〇万人のうち約八〇万人が朝鮮族だが、彼らは韓国への出稼ぎを通じて当地の消費を押し上げ、韓国企業の誘致などで力を発揮している。消費の強さやポーター経済といった類似性からか、当地では「南の深圳、北の延吉」という表現も耳にした。なるほど局所的な経済発展が全国から人を引き付けている点も似ている。中国の内陸部発展の原動力の一

つは「都市化」に他ならないが、二〇〇八年末の延辺州の都市化率（都市人口の比率）は66%と、同年の全国平均46%を大きく上回っている。

当地の「ローカル性」が、少数民族自治という制度によって保護されていることは重要だ。

深圳は全国各地からの移民が作った新興都市で、広東省にありながら広東語ではなく標準語が使われているが、朝鮮族自治州である延辺州が朝鮮語を忘れることはない。延辺州の条例は、政府機関は朝鮮語と中国語の双方を用いねばならず、特に朝鮮語を主たる言語とすること、人材活用や高等教育で朝鮮族を優遇せねばならないこと、朝鮮族の伝統文化を継承し発揚すること、延辺州政府の州長は朝鮮族でなければならないことなどを定めている。

大阪万博の「人類の進歩と調和」という壮大なスローガンは、その後のグローバル社会の到来を予感していたようにも感じられるが、上海万博のスローガンは「より良い都市、より良い生活」である。グローバル化が進展した現代において、改めて都市レベルでの多様性を見つめ直す響きがある。

延辺州は、上海万博で独自の出展申請も行っている。北東アジアの明珠」とも形容されるこのユニークな「辺境都市」が、その魅力の世界に強く発信できることを願っている。

（あずまよしあき・日本銀行北京事務所副所長）